じゃま、おじゃま

「じゃま おじゃま」

家族で金沢に引っ越すことになり、私はこの集合住宅に住むことになった。

どうやら親は、この集合住宅に住みたいがために、ここへきたらしい。

別に隣人に会っても何かするわけでもないし、すれ違っても会釈だけ。わざわざ金沢に来て、なんのこだわりがあるのやら…

「人に迷惑をかけない。」

それが、集合住宅での正しい暮らし方だと思っていた。

正直住む場所なんて、きれいで広ければなんでもいい。

どこも同じでしょ、集合住宅なんて…。

そして引っ越してきた日、私は驚いた。

部屋の壁が開いた。

外へと開くだけでなく、隣と、自分の部屋もひとつの空間になる。

そのとき、向こうから、一人の住人が笑顔で言った。

「おじゃまします。」

私は思わず、

「……じゃまだ。」

と心の中でつぶやいた。

それでも、その日をきっかけに、少しずつ日常が変わっていった。

一緒にご飯を食べる日ができた。

本を貸し借りするようになった。

何も話さず、それぞれ好きなことをして過ごす日もあった。

壁が開くたびに、自分の世界が少しずつ広がっていく。

気づけば、以前のように一人で閉じこもることが少なくなっていた。

隣人の壁が開くときを少しだけ楽しみにしている自分がいた。

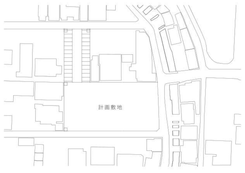
壁が開く。今度は私が、その向こうへ足を踏み出す。

「おじゃまします。」

この建築は、壁を開く建築ではない。

人と人との心を開く集合住宅である。

01.site



敷地は石川県金沢市長町1丁目で、せせらぎ通りに隣接する。西側には長町武家屋敷、東側には香林坊があり、都市部と住宅街の間に存在し、せせらぎ通りにさまざまなお店が立ち並んでいる。

02.context

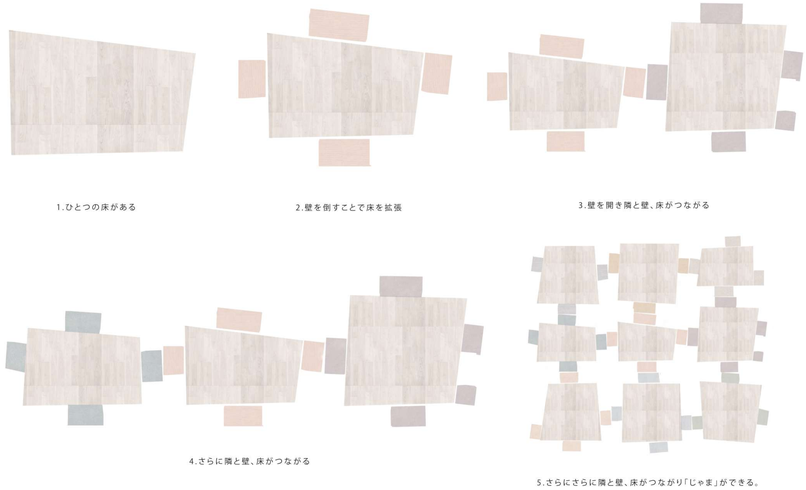
現代の集合住宅ではプライバシーや防犯性が重視され、住戸同士は明確に区切られている。隣人と顔を合わせても会釈を交わす程度で「人に迷惑をかけない」「互いに干渉しないこと」が暮らしのマナーとなっている。そのため、建物には多くの人が暮らしていても、隣人を知らないまま生活することは珍しくない。人との関りを避けることが当たり前になった現代の集合住宅は、住戸は安心できる居場所である一方、人とのつながりが生まれにくい空間にもなっている。

03.motivation

壁は本来、人を分けるために存在している。しかし建築は、本当に人を分けるだけの存在なのだろうか。私は壁が「隔てる装置」であるだけでなく、「関係を生む装置」にもなれるのではないかと考えた。また「じゃま」と「おじゃまします」は、どちらも相手の領域へ入る行為である。違うのは、相手への敬意があるかどうかだけだ。現代の集合住宅は、「迷惑をかけないこと」が重視されるあまり、他者の領域へ踏み込むこと自体が避けられている。しかし、人との関係は、誰かの領域へ一歩踏み出すことでしか生まれない。私は、その最初の一歩を建築が後押しできるのではないかと考えた。

04.diagram

各住戸には四方向に開閉可能な壁を設け、住戸同士や共用空間との関係を住民自身が選択できる構成とする。壁が開くことで空間は拡張される一方、通路には小さな「じゃま」が生まれる。その邪魔は人の流れを完全に止めるのではなく、立ち止まる・迂回する・声を掛ける・立ち寄るといった行動を誘発し、偶然のコミュニケーションを生み出す。



1.ひとつの床がある

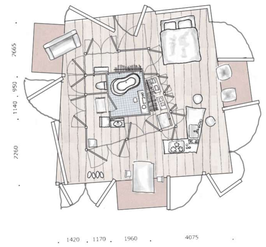
2.壁を倒すことで床を拡張

3.壁を開き隣と壁、床がつながる

4.さらに隣と壁、床がつながる

5.さらにさらに隣と壁、床がつながり「じゃま」ができる。

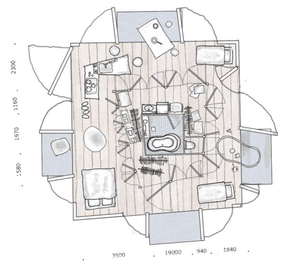
05.住戸別タイプ



平面図　1:150

4人タイプ　→

家族それぞれが自分の居場所を持ちながら、壁を動かすことで暮らしの距離を自由に調整できる。子どもが遊ぶ日はリビングを広く。来客がある日は中庭へ向かって壁を開く。



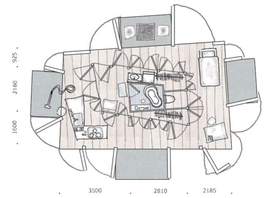
平面図　1:150

←　2～3人タイプ

二人で暮らす日も、一人で過ごす日も、この家は少しずつ形を変える。朝は壁を開いて光と風を取り込み、夜は閉じて落ち着いた空間をつくる。今日は一緒に食事をしよう、今日はそれぞれの時間を過ごそう。

1人タイプ　→

一人暮らしだからといって、いつも一人で過ごすとは限らない。今日は壁を少しだけ開けてみる。隣を歩く人と目が合い、「おじゃまします」と挨拶を交わす。それだけで、静かだった部屋が少しだけ街とつながる。



平面図　1:150